オペレッタへの取り組み

1.教育現場における「甘え」と「わがまま」について
　～　オペレッタを上演する活動を通して気づいたこと　～

2.輝け　子ども達　優しさと厳しさ

3.オペレッタ　流れと視点

4.表現活動「オペレッタ」を通して

5.オペレッタに取り組んで

6.【考 察】

1. 教育現場における「甘え」と「わがまま」について

～　オペレッタを上演する活動を通して気づいたこと　～

「甘え」や「わがまま」の善し悪しについて考えてみると、自分自身の能力を伸ばしていく意味では、大変マイナスになるものであると考えます。しかし、親子関係や恋人、夫婦関係においては、必ずしもマイナスになっているとは言い切れない場合もあります。

学校現場において、児童が「甘え」や「わがまま」を出す場合、たいていが能力不足で自信がなく、その問題を乗り切れない場合に出てくることが多いです。

私は、全校の子どもたちの心が荒廃し、ルール無用の学校生活を送り、いじめ、不登校、怠学、教室脱走というほぼ学校崩壊に近い学校に勤務したことがありました。子どもたちは、やりたいことだけやり、努力してできるようになると言う気持を失っていました。私にとっては、子どもたちの言動が「甘え」と「わがまま」の固まりのように見えました。

子どもたちは、低学年の時から「この子たちは言ってもわからないからしょうがない」と大人に見放されていた所もあって、「自分の良さや生きる喜び」、「可能性の引き出し方の喪失」、「自信喪失」。弱い者同士仲間と思って相手を攻撃することで必死にガードしていたように見えました。

甘える時期に甘えさせることをしていない子どもたちは、自分を表現することがとても未熟で、教師にとっては、それが「わがまま」にとらえられていたようでした。

この学校に赴任して担任したクラスは、授業は成立しないし、教師の言うことを誰も聞こうとしない状態でありました。

私は、まず「してはだめ」と言う代わりに「してもいいよ」と言うことを子どもたちに投げかけました。ただし、「なぜそうしたいのか」、「それをすることによってどんなことが起こるのか」などをみんなで話し合うようにさせました。話し合いの中で、子どもたちは、「してはいけない理由」に気づきはじめました。そして、自分たちから「ルールを守ることの必要性」を考え、「自分たちの存在の大切さ」に気づき始めました。そして、自己を認め、他人を認めることができ、自分を活かす為に活動するようになって、とても成長を感じました。

いつも私の気持ちの中にあったのは、「どんな子どもも変われる。」でした。

翌年、学校全体が少しは落ち着きを見せていましたが、子どもたちは、まだまだ自分を生かすことができずに、くじけてしまうことも多かったです。

私は、この年に生徒指導主任になりましたので、昨年まで同学年だった担任の先生と共に、表現活動に重点を置いて以下の視点でオペレッタに取り組ませることにしました。

「表現力や想像力を培い」、「他者を理解する能力を育てたい」「生きる力の育成」。「個々の自信の回復」、「自己実現」。「達成感や満足感」、「成就感」、「存在感」、「連帯感」を味わわせたい。という願いを持ちながら、「物事の本質を問う姿勢」で、教科や表現活動に取り組みました。

オペレッタは、【僕は捨てない、見捨てない。人を捨てない、見捨てない】をテーマに「なかま」を表現しました。
オペレッタの内容は、自分たちの日常の学校生活の中でオペレッタを作り上げるまでを題材に、担任の先生と子どもたちで脚本を作り、全員が主役として取り組みました。
練習の過程においては、プロのオペラ歌手やプロデューサー、アナウンサーにも指導をしていただき、本物の素晴らしさにふれさせていきました。
発表会場も市のコンサートホールを手配し、一般公開とし、運営、進行、照明、音響の舞台効果やステージマネージャーは、プロフェッショナルの方に指導していただきながら、子どもたちに取り組ませました。
そうすると、気力を失っていた子どもたちの目は輝きはじめ、目標に向かって一丸となって取り組む姿が増えてきました。
終わってみると「甘え」や「わがまま」は消えてしまい。「できないことは、努力して取り組めばいいんだ。」「一生懸命にやることが楽しい」と感じることができるようになりました。
子どもたちを指導していく中で、私たちの心の中にあったものは、「子どもは、甘やかすな。甘えさせろ。」と言うことと「厳しさの反対は甘さ、優しさの反対は冷たさ。」優しさと厳しさを持って正面から子どもと向き合うことでありました。
こうしてみると、成長の過程において甘えることも大切であり、自分の存在感を感じると安心して前向きな姿勢にかわり、全体の中の自分の大切さを子どもなりに考えていくことができるのだなと実感しました。
そして、「わがまま」を出していた子どもたちも、自分の努力不足を感じ、懸命にできるようになりたいと努力するようになって、とても表情が明るくなりました。
「受容と突き放し、見守り、支え、励まし」をよく子どもたちを観察しながら、使い分けていくことが私たち教師にとっては重要なことであります。
使い方を間違えると、本来持っている子どもたちの可能性をつぶしていくことになります。
このオペレッタを通じて、私たち教師も子どもたちの新たな可能性を目の当たりにすることができ、自分自身の自己成長へとつながりました。
私たち教師は、幅広い目をもてるよう、日々努力が必要であることも学びました。

2. 輝け　子ども達　優しさと厳しさ

何をする訳でもない。ただ毎日が過ぎていく。
それでも子ども達は成長していく。
世の中の流れや子ども達のおかれている環境、接する人間によって進んでいく道が違ってくる。
子ども達は、みんな素晴らしい力を持っている。
光り輝くダイヤモンドの原石のように、秘めた力を持っている。
その力の存在を信じ、磨いていこうとするときに子ども達は輝き始める。
しかし、その力に気づく子どもは決して多くはない。
力を引き出す環境や励ましによって、徐々に子ども達は自分の力に気づき始める。
時には優しく、時には厳しく励ますことによって自信へとつながっていく。
「あれ、私にもできた」という喜び、私もみんなも伸びていく・・・。
集団の力と所属感。
みんなと共に伸びていく喜びを感じてほしい。
しかし、優しさが甘さに、厳しさが冷たさになってしまうと、子ども達の力は衰退していくだろう。
優しさと厳しさをもって接することで、子ども達に本来もっている素晴らしい力を発揮してもらいたい。

このオペレッタを通して、本来もっている素晴らしい力に気づき、精一杯演技することで個々の自信へとつながってくれればと願います。

3. オペレッタ　流れと視点

むかつき
攻撃・虚無感
あきらめ
無感動

偏見

心の荒廃
劣等感

差別

優越感

表現力や想像力を培い、他者を理解する能力を育てたい。生きる力の育成（個々の自信の回復、自己実現）

・　自分の良さ、生きる喜び、可能性の引き出し方の喪失。自信喪失。弱い心を弱い者同士仲間と思って相手を攻撃することで必死にガードしていた。

達成感・満足感・成就感・存在感・連帯感を味わわせる。

オペレッタに取り組もう

表現の総合的なもの

物事の本質を問う

・国語→文章内容の理解と朗読の工夫
・社会→歴史の成り立ち、私たちとの関係
・算数・理科→ものの見方の違いによる発見・工夫
・体育→身体の動き、表現に必要な体力リズム感
・図工→自分の気持ちの表現・細かい工夫、描写
・音楽→心の解放、揃うことの心地よさ(ﾊｰﾓﾆｰ･ﾘｽﾞﾑ)
・道徳→自己を深く見つめる・・何故大切なのか

・何故、そうしたいのか
・何のためにするのか
・そのことで何を望むのか
・それは、どんな仕組みになっていて、どんなところに役立っているのか

7 月

サマーコンサート

【クラスでの取り組み(音楽室での発表)】
・表面的な格好良さの追求・・まねごと
・恥ずかしさ、中途半端
・達成感、成就感、存在感、連帯感あまりなし

本物の素晴らしさを味わわせたい（自分の素晴らしさ）
・簡単にはできない
・努力と観察、思考が必要
・協力、助け合い、認め合うことが必要

10 月

パストラルホールでの音楽授業

【ホールの特性を知り可能性の発見】
・個々のアイディアを駆使
・意欲の芽生え
・可能性への挑戦開始→失敗ＯＫ

教師も再発見（ホールの特性・児童の考え行動）
児童と共に模索

10・11 月

プロのオペラ歌手の指導・実演

【本物の素晴らしさを体験】
・「自分もああなりたい」・・あこがれと目標設定
・「どんなことをしたらよいのか」具体的実践へ向けての意欲
・認められ、自信の回復
・更に自分を高めるための努力への意欲の芽生え

教師の視野拡大
・指導法の視点
・良さの捉え方
・育て方の違い
・視点の当て方

12 月

玖西地区音楽部授業研究発表

【真剣な姿を見てもらおう】
・型にとらわれず自分を表現しよう
・協力し合って作ろう
・心から楽しもう
・参観者もみんなも共に参加して楽しさを分かち合おう
・本当の自分を見せよう

反省
・自己チェック

新たな目標設定

12 月

ウィンターコンサート

【６年全体の取り組み・コンサートホールにて学校内の発表】
・人前での表現の難しさを体験し、向上心の芽生えが生まれる
・プロの厳しさを知る
・プロの舞台での演技力の凄さ、真剣さに触れる

KRY
「ﾁﾋﾞｯｺﾊﾞﾝｻﾞｲ」
取材

児童の手でコンサートを運営させたい。

裏方、会場案内、会場づくり、駐車場、チケット、チラシ、ポスター、アナウンス

・失敗ＯＫ　→　失敗から学ばそう。
・子どもの発想を生かそう

教師の児童へ対する新たな発見

3 月

2000 年春明日に架けるコンサート

児童一人一人が自主的な取り組みで生き生きしていた

4. 表現活動「オペレッタ」を通して

「自分に気付く」、「人に気付く」、「周囲に気付く」取組や活動を仕組もう

・一人一人がみんな主役
・自分で創ったオペレッタ　みんなで創ったオペレッタ
・全てを任せた　→　目標、目的が生まれた。(会場、音響、照明、演出、効果、接客。プロとの接触)
・自分にも出来た喜び　自己発見　他者発見　他人と協力することの大切さ　認め合い（落ち着く）
・他者への関心度が上がり、他者の気持ちを考える難しさを知る。
・失敗ＯＫ　失敗から学ぶ　→　失敗は経験なんだ。次のステップへ行く学習なんだ。
・みるみるやる気になって、次への夢が生まれた。

一言で言うと「子どもたちの自信の回復と、可能性の発見」

頑張ること（自分がやりたいこと）が楽しい　一生懸命が楽しい

子どもたちに「容易にへこたれない頑張り抜く気持ち」が育っていった。また、短絡的にできない結論を出さず自分たちには、もっとできることがあるという自信がついた。

教師側は、より慎重に、物事を意図的に計画的にやらないとできないことが分かった。たとえ、思いつきであっても、やるためには、より周到な計画がなくてはできない。

子どもたちの素晴らしい力、可能性を実感（教師・大人の子どもへの見方、とらえ方が変わる）

人間が本当の意味で自立し、ふれあい、支え合い、共生していくということは、どういうことなのでしょうか。簡便なコミュニケーション手段に頼る前に、本来的な人と人とのコミュニケーション能力をもっともっと鍛え高めておく必要があるのではないでしょうか。
言語や記号だけのコミュニケーションではなく、非言語的コミュニケーションも含めて、もっと身体を揺さぶるような感動や共感、その体験の共有こそ教育の現場に必要なのではないかと思っています。

心身の発達成長過程において、自分の力で深く考え、感じ、意見を述べ、表現できること、それを鍛えていくことは、教育の目標の一つです。

創作過程は、決して平坦ではなく、人と人との意見のぶつかりあいや葛藤が生じ、様々な人との関係や連絡調整能力を鍛えていかざるをえません。また作品の創造においては、知識・技術・体力・気力・想像力を投入し、時にハードな練習も乗り越えていかなければ、実りあるものにはなりません。容易にあきらめない態度や気持ちで負けない姿勢が要求されると思います。
公演に向けての周囲の期待感と緊張感、協力体制こそが最後の鍵だと思います。
ここまでくれば、もう子ども達は、本当の力を精一杯発揮します。

オペレッタに取り組んでいく中で、子どもたちは誰のためにでもなく、自分の持てる力を素直に前に、人に伝えようと必死になります。
そこに大きな感動があります。

5. オペレッタに取り組んで

◆　児童の変容

・　思い出ができた。やらなくては思い出はできない。その思い出の中身は、「自分に気付く」、「人に気付く」、「周囲に気付く」ということであった。

・　思春期に向かう子どもが言葉に表せない感覚的な良い体験を共有できた。これから先の人生で振り返った時、人生の明るい部分を植え付けられた。それは、芸術や演劇のもつ力でもあると思う。

・　前向きな課題を与えることで、子どもが生き生きする。しかし、課題を与えてほうっておいたのでは生き生きしない。そこに、指導があったからこそ。

・　一人一人に役割や出番があった。どんな人でも役割や出番があることで有用性を感じることができる。また、まわりがそれを認め合うことで、個人が成長していった。個人が成長するとグループが成長し、その相互作用がおきていった。集団のもつ力の発揮。

・　人前で表現することを鍛えていくことで、物怖じしない態度や自信がついた。はきはきとしゃべり快活なあいさつにもつながった。

・　容易にへこたれない頑張り抜く気持ちが育っていった。また、短絡的にできない結論を出さず自分たちには、もっとできることがあるという自信がついた。

・　友達もがんばっていることについて、良い意味での競い合いがあった。互いに高め合う中で仲間意識も生まれた。

◆　教師の変容

・　やり遂げたことへの喜びと自信。

・　子どもがこれほど、生き生きするものかという発見。

・　より慎重に、物事を意図的に計画的にやらないとできないことが分かった。たとえ、思いつきであっても、やるためには、より周到な計画がなくてはできない。それがなくては一人でからまわりし周囲にもストレスを感じさせ力が伸びない。
　また、やり遂げるためには、時間の有効活用と投げ出さない根気力も必要である。

・　理念と方向性が間違っていなければ、必ず良い結果が生まれることがわかった。

・　「どうせやっても、この子どもたちにはできない。」とあきらめるのではなく到達目標を高くかかげることでその目標に行きつく努力を教師も子どももする。子どもの可能性を信じることの大切さを感じた。

・　教育を単に教室に押し込めず、社会の中で考えていこうとした。さまざまな立場の人がからむことで深まりや広がりがあり、保護者や諸機関の協力を得ることの有効性にも気付いた。

今後、地域や家庭、他の機関からの力を借りることについて検討を深め、教育の場を社会にひろげて行きたい。

6.【考 察】

●なぜオペレッタなのか？

一言で言えば、**「子どもたちの自信の回復と、可能性の発見」**ということにつきます。
また一人一人や集団の成長を促す試みでもあります。

●今回のテーマについて

「コミュニケーションのあり方について、もっと自分の身体や言葉を信じたいということ。そのためには、人まかせ機械任せではなく、**自分自身の身体や言葉を鍛えていく必要があり、今をきちんと生きていかなければならないということ。**」です。

このような状況のなかで、**人間が本当の意味で自立し、ふれあい、支え合い、共生していくということは、どういうことなのでしょうか。簡便なコミュニケーション手段に頼る前に、本来的な人と人とのコミュニケーション能力をもっともっと鍛え高めておく必要があるのではないでしょうか。言語や記号だけのコミュニケーションではなく、非言語的コミュニケーションも含めて、もっと身体を揺さぶるような感動や共感、その体験の共有こそ教育の現場に必要なのではないかと思っています。**

自分だけではなく相手との関係を支え合いながらの、とてもしんどい作業です。

しかし、その中で、自分を見つめ直すきっかけになったり、いつもと違う自分や相手を発見したり、伸びかかった成長の芽や目標に出会えたり、みんなが、少しずつ確実に変化していくように思います。結論を急がないこと、あきらめないこと、めげないこと、子ども達にも教師にも、保護者や見守る周囲の人達にとっても、とても必要なことだと思っています。

心身の発達成長過程において、**自分の力で深く考え、感じ、意見を述べ、表現できることそれを鍛えていくことは、教育の目標の一つです。**それを具体的に実践していく過程がオペレッタにはあると思っています。

●オペレッタの実際にあたって

創作過程は、決して平坦ではなく、人と人との意見のぶつかりあいや葛藤が生じ、様々な**人との関係や連絡調整能力を鍛えていかざるをえません**。また、作品の創造においては、**知識・技術・体力・気力・想像力を投入し、時にハードな練習も乗り越えて**いかなければ、実りあるものにはなりません。**容易にあきらめない態度や気持ちで負けない姿勢が要求されると思います。**

公演に向けての周囲の期待感と緊張感、協力体制こそが最後の鍵だと思います。ここまでくれば、もう子ども達は、本当に精一杯の力を発揮します。**誰のためにでもなく、自分の持てる力を素直に前に、人に伝えようと必死です。そこに大きな感動があります。**

●オペレッタの成果について

しんどいこと、つらいこと、厳しいこと、難しいこと、耐えること、時間のかかること、深く考えること、実際に身体を動かし試してみること、それを繰り返すことで、めげない、負けない、あきらめない、みんな少しづつ強くたくましくなっていきます。

保護者を含め周囲の子ども達を見る目がちがってきました。子ども達には、まだまだこんなパワーがある、やればできる、見直した等…。これからの子ども達の教育環境を考えた場合に、子ども達だけ、保護者だけ、教師だけではどうしようもありません。地域社会を含めた全ての支えあいが必要なのだと思います。地域全てが、**子ども達を育てる、共生していく、支え合うという具体的な実践と、温かい眼差しが必要**に思います。

そうした環境の中でこそ、今回の体験は、ますます有効だと思っています。

今後の子どもたちの人生のなかで、人への思いやる気持ちや、みんな仲間であり支え合っていこうという気持ち、自分を再発見する楽しみや自分への自信、もっと感動しながらいきいきと生きたい、もっと自分を鍛え高めていこう、という姿勢が芽生えたら、これ以上の幸せはありません。

石井郁夫ＥＧＣ